

忘れた頃の
尾が引く



洗面台の蛇口を勢いよくまわし、竹井は力任せに顔を洗った。

「そんなに落ち込むなって」

顔を洗っても、浮かない表情の竹井を見て、慶太は言った。

「別に落ち込んではいない」竹井は顔を濡らしたまま、鏡越しに慶太を睨んだ。

本当に落ち込んでいない。いつものことだからだ。

しかしまあ、ショックは大きい。

「いいか？いつも言っているだろ。お前が右だと思ったら、左が正解なんだよ」

慶太は左手で右を指し、右手で左を指した。

「わかってるよ。分かっているけど、仕事中はそんなこと気にしてられない」

「仕事なんて気にしていないくせに」

「うるさいな」

「お前はいつもそうだよな。大事な約束を放っておいて、どうでもいいことばかり気にかける」

慶太は竹井を見下すように見つめた。

「いつだったかな。一緒にカブトムシを探しに行った日だ。森に入った途端、お前はセミに夢中になって、セミが何処で鳴いているのか探しまわった。肝心のカブトムシなど探しもせず」

「子供の頃の話を持ち出すなよ。セミくらいいいだろ、別に」

慶太とは長い付き合いだ。この話になると、いつも小さいころの奇行を持ち出してくる。

「じゃあ、大学生の時の話をしようか？自動車免許の講習、何回落ちたっけ？」

慶太は意地悪そうに指を折って数えだした「ああ、手の指だけじゃ足りないな」と言って笑った。

「俺さ、思ったんだ」竹井は慶太の方を見ずに言った。

「生きることが向いていないんだ」

「今更なに言ってんだ？何年生きてるんだよ」

慶太の声色から冗談が抜け、本気で怒りそうになった直後、休憩室に人が入ってきた。

「竹井君、休憩終わっているよ」同僚の笹田だ。

「あ、すみません」竹井は慶太の方を見ずに、休憩室から出た。

出来心だ。別にこんな長くいようと思っていなかった。決断をズルズルと先延ばしをして、今に至っている。

「笹田さんは、この仕事何年目ですか？」

「うーん、五年目かな？よく分かってないけど」笹田さんは笑った。

「そんなに辛い仕事じゃないしね。時々面倒なこと起こるけど」

「すみません」竹井は自分の失態を思い出して、思わず頭を下げた。

「あ、竹井君を責めているわけじゃないよ。誰だってミスはするさ」笹田は竹井の肩を叩いた。

「でも、ほんと、責めるつもりないけど、竹井くんは同じミスをするよね。右と左がひっくり返

るといふか」

竹井の胸に笹田の言葉が突き刺さる。死角で慶太がほくそ笑んでいる気がする。

「何か訳でもあるの？」

「いえ、別に……」

「そか。何でも言ってね、苦手なことがあれば、それをフォローし合うのも仕事だからさ」

そう言って笹田は「俺はカメレオンが苦手だから、出てきたらよろしく」と言った。

「笹田さんはいい人だよなあ、そんな笹田さんにまで迷惑かけちゃってさ」

仕事を終えた帰り道、慶太がまとわりついた。帰り道くらい静かに帰りたいが、どう帰っても慶太がつきまとう。竹井は最短ルートで帰宅するしかなかった。

早歩き竹井は慶太の言葉を無視した。気を悪くしたのか慶太の口はより悪くなっていく。

「だからって、変な気起こすんじゃねえぞ。死なれたりしたら居心地が悪い」慶太は、休憩中の竹井の言葉を気にしているようだった。

「淡々とやってりゃいいんだよ。ほら、月を見ろ。誰かに頼まれたわけでもないのに、毎日欠けては満ちていくだろ？」

珍しく慶太がロマンチックなことを言うので、竹井は空を見た。

「今日は新月だよ」

竹井は何も言わず、前方に視線を戻した。

慶太の言うことを肯定するのは気に食わないが、淡々と日々をこなすのは間違っていない気がする。でも、それじゃ何の意味があるんだろう。何のために生きているんだろう。そう考えるだけ野暮か。